



城東図書館 2025年3月21日～4月16日実施

まちのひと 末満 あみさんの紹介本リスト

中学生

地雷グリコ

青崎 有吾/著

KADOKAWA

この小説では、小さな頃、「グリコ」や「じゃんけん」、「だるまさんがころんだ」、「神経衰弱」など、皆さんが一度はしたことのあるであろう遊びが原形になったゲームをします。少しアレンジが加わっており、頭を使うことが必須なのですが、ある一人の女子高生“射守矢真兎”によって、全てのゲームを完璧に攻略していきます。

中でも、見ていて面白かったのは、タイトルにもある「地雷グリコ」です。グリコが元になっているのですが、名前通りグリコという遊びに“地雷”という要素が組み込まれたゲームです。最後の展開には、思わず声が出てしまいました。

よくある遊びを頭の使うゲームに変える…という発想が面白くて、未だに何度も読み返しています。

GOTH

乙 一/著

KADOKAWA

私が人生で初めて読んだホラー小説です。その当時からゲームセンターにあるようなゾンビシューティングなどが好きだったのですが、それが足元にも及ばないクオリティだったので、初見時は驚きました。

まず、この小説で最も驚くべきことは語彙の幅広さです。例にあげると、人間の異常さを描くことです。これ自体はさほど難しいことではないのですが、“主人公の異常さを描く”ということがあれば上手い方を私は初めて見ました。今思うと、初のホラーにあれはなかったなど若干後悔すら感じています。ただ、展開や設定が上手いことは事実で、今でもよく読んでいます。

世界中にはまだ私が読んだことのない沢山のホラー小説があるのは知っていますが、私にとって、あれに勝るホラー小説はありません。

私たちの世代は

瀬尾 まいこ/著

文藝春秋

タイトルに惹かれて読んだ小説だったのですが、思っていた何十倍は感動してしまいました。何故かという、私たちは“コロナ”のせいで外出が出来ず、リモートになったり、登校する時間が減ったり…といった状況になったでしょうが、この小説の中でもコロナとは違いますが、別の感染症によって同じような状況になりました。そんな世界を主人公は生きている、というお話です。状況がまるで同じなので、それあったよね、分かる!と共感が止まらず…。最後の展開にも目を離せず、ついつい最後まで一気に読みました。

タイトルだけで選んでも、結構良い本を見つけられると知り、様々な本に手を出すキッカケになりました。

溺れながら蹴りつけろ

水瀬 さら/著

PHP研究所

私は“小説を読むことが好き”で留めていたのですが、一年ほど前に“小説が好き”に変わりました。書くのも読むのも好きになり、世に出す気は全くありませんが、こつこつ書くようにもなり…。そのきっかけがこの本です。

皆さんには「好きなこと」はありますか？この本は「好きなこと」を通じて仲良くなった二人のお話です。無断転載やパクリが主なテーマとなっており、世間に広がる訳でもない、作家になる上での小さな闇が描かれています。

「好きなこと」を貫くのはとても難しく、大丈夫だなんて自分に言い聞かせても、大丈夫だって分かっている、やっぱり周りの視線が怖いから、好きなことを出来なくて…それでも、「好きなこと」をなかったことにはしたくない。「好きなこと」を貫けない主人公と、さらけ出すその友人。どちらの生き方も、カッコイイと思う人は多いはず。

社会問題となっている LGBTQ+に少し踏み込んだ小説です。主人公の少年と、その友人である、とある少年のお話となっているのですが、私は涙脆いでしょう。見る度に泣いてしまいます。ただ、私にはこれ以上書けません。

書いていて思うのは、私は自分の人生にあれだけの影響を与えるほどの本を言語化出来ないということです。大好きで、大切に、大事な本ほど、言いたいことがありすぎて書けないのです。

ただ、「好き」も「嫌い」も、自分で決めるものです。今、私は中学生で、もうあと五年も経てば、世間では大人と言ってもいい年齢になります。私たちの「好き」「嫌い」も「生き方」も、今は大人が決めます。でも、これから先は、誰も私たちの生き方を決めてくれないのです。これからはもう、自分の責任になる。「好き」も「嫌い」も、全部自分のものになる。怖いけど、それでも自分の「好き」を信じて生きるということの大切さを私は学びました。

人間みたいに生きている

佐原 ひかり/著

朝日新聞出版

この小説は、私の人生を根本から否定して、根本から変えてくれて…私が初めて、自分で手に取った一冊です。そして、私の人生で一番大切な本です。もしこの本がなければ、私はきっと、“本”というものに会わず死んでいました。

当時、私は給食という行為がたまらなく苦手でした。他人と食べることが本当に苦手で、家族と食べることすら気持ち悪いのに、そんなの言えないから口に留めて…無理やり口に詰め込んでいました。

食べたくない訳じゃないけれど、食べたくない。主人公も同じでした。この小説の主人公は私と違い、“食事”がダメなのです。食べるという行為がダメなのです。

涙が溢れてきました。私という存在を、私の様な異端な人間を、認めるものがあるなんて。小説って、凄いんだなって。

冒頭から衝撃の文章が飛んでくるのですが、私はこの本に会えて良かったと思います。自分の常識を変えてくれたこの本には感謝しかありません。人間を、周りを、自分を信じるための一作です。

表示 4.0 国際 (CC BY 4.0)

転載等の際は “大阪市立城東図書館「まちのひと文庫」推薦文”との表記を入れてください

大阪市立城東図書館

大阪市城東区中央 3-5-45 06-6933-0350

<https://www.oml.city.osaka.lg.jp/>